

法然上人のご法語 第二十一

精進

あるいは金谷きんこくの花を玩もてあそびて遅々

たる春の日を虚しく暮らし、あるい

は南楼なんろうに月をあざけりて漫々たる秋

の夜を徒いたずらに明かす。

あるいは千里の雲に馳せて山の

かせぎ

鹿を捕りて歳を送り、あるいは万里

の波に浮かびて海の鱗いろくずを捕りて日

を重ね、あるいは嚴寒げんかんに氷を凌ぎてしの

せろ

世路を渡り、あるいは炎天に汗をの

ごいて利養を求め、あるいは妻子眷

おんない

属に纏われて恩愛の絆、切り難し。あ

しゅうてきおんるい

るいは執敵怨類しんにに会いて瞋恚のほ

むら止むことなし。

惣そうじてかくのごとくして、ちゆうや昼夜

朝暮ちようぼ、行住坐臥ぎようじゆうざ、時として止むこと

なし。ただほしきままに、飽くまで

三途八難さんずはつなんの業ごうを重ぬ。

然れば或る文には、「一人一日の中  
に八億四千の念あり。念々の中うちの所  
作、皆是れ三途の業」と云えり。

かくのごとくして、昨日も徒らに  
きのう

暮れぬ。今日もまた、虚しく明けぬ。

いま幾たびか暮らし、幾たびか明か

さんとする。

● 「金谷」

金谷園。中国晋の時代、豪華な遊  
びが繰り広げられたと伝えられる場  
所。

● 「南楼」

同じく晋代に建てられた望楼。

思へばこの世は常の住み家にあ  
らず

草葉に置く白露、水に宿る月よ  
りなほあやし

金谷に花を詠じ、榮花は先立つ  
て無常の風に誘はるる

南楼の月を弄ぶ輩も 月に先立  
つて有為の雲にかくれり

人間五十年、化天のうちを比ぶ

れば、夢幻の如くなり

一度生を享け、滅せぬもののあるべきか

これを菩提の種と思ひ定めざらんは、口惜しかりき次第ぞ

(「敦盛」より)



● 「三途八難」 仏教に出会うこと

ができない境涯

\* 地獄・餓鬼・畜生 (いずれも甚だ

しい苦痛のため)

\* 長寿天 (長寿の神の世界。求道

の心が起こらない)

\* 辺地 (辺境の地)

\* 盲聾瘖症 (感覚の障害)

\* 世智弁聡（世俗智だけにたけてい

る）

\* 仏前仏後（釈迦仏誕生以前と、末

法以降の法滅の時代）